慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	毒婦阿蓮の造形：『新編金瓶梅』の勧善懲悪
Sub Title	Characterization of vamp Oren: poetic justice in "Shinpen-Kinbeibai"
Author	神田, 正行(Kanda, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.200- 221
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0200

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

毒婦阿蓮の造形

――『新編金瓶梅』の勧善懲悪――

神田　正行

はじめに

天保二年に刊行された長編合巻『新編金瓶梅』第一集（国安画。甘泉堂刊）の序文において、馬琴はこの合巻の趣向源である『金瓶梅』の作風を、「国俗（みくにうと）の、浮世物真似といふものめきて」と評しており、彼が同作の持つ写実性に着目していたことをうかがいうる。『金瓶梅』の世態描写は、登場人物たちの庶民的な会話に支えられたものであり、同書の難解さもまたこの点に由来している。とりわけ西門慶の第五夫人潘金蓮は、ことわざや歇後語（しゃれことば）を多用した痛烈な罵語をもって、読者に鮮明な印象を与える。

『新編金瓶梅』の述作に際して、馬琴が原作の写実性を顧慮した形跡は見出されず、この合巻の実質的な女主人公である多金（たがね）の阿蓮（おれん）も、弁舌においては金蓮ほどの辛辣さを有していない。これは、挿画を主体とする合巻であってみれば、やむを得ぬ仕儀かも知れないが、あるいは「用語の庶民性」ゆえに、馬琴が『金瓶梅』における個々の会話を、じゅう

ぶん味読しえなかったことに由来するのかも知れない。

周知のごとく『金瓶梅』は、『水滸伝』の武松譚に想を得た艶情小説である。馬琴は『新編金瓶梅』において、『金瓶梅』では脇役の位置に甘んじていた行者武松を、善の側の主人公・大原武二郎に転じて、その活躍を詳細に描き込んでいる。その結果『新編金瓶梅』は、原作以上に報仇譚としての色彩が濃厚となった。西門屋啓十郎や尼妙潮（原作の王婆に相当）とともに、武二郎の仇敵となる阿蓮は、際だった饒舌さこそ持ち合わせないものの、原作の潘金蓮や主人啓十郎にも増して、悪辣な毒婦として造形されている。この点には、勧善懲悪に対する馬琴の配慮が働いていたものと思しく、奇矯を喜ぶ時流への迎合として、安易に看過すべきではない。

本稿では、この多金の阿蓮の人物造形を取り上げて、『金瓶梅』や『水滸伝』における潘金蓮と比較しつつ、その独自性に考察を加える。その上で、彼女が惹起する諸々の事件についても検討を行ない、馬琴の創作意図が奈辺に存したのかを明らかにしてみたい。

一、阿蓮・啓十郎の悪因縁

すでに別稿においても言及したように、[*1]『新編金瓶梅』の阿蓮は、山城国の百姓・矢瀬文具兵衛（のち西門屋文字八）と妻山木の間に生まれた娘であり、幼名を多金という。武太郎・武二郎兄弟の父親・大原武具蔵は、文具兵衛の弟であり、西門屋啓十郎の実母遅馬（のちの陸水尼）は、文具兵衛の妹である（図1参照）。つまり、啓十郎と阿蓮・武二郎の三者は、従兄弟同士として設定されており、馬琴は第一集四十丁を費やして、この独自の人物関係を読者に提示した。

甥の武太郎を欺いて、武具蔵の遺財を奪わんとした文具兵衛夫婦は、左京兆三好長兼から叱責されて矢瀬の里を追わ

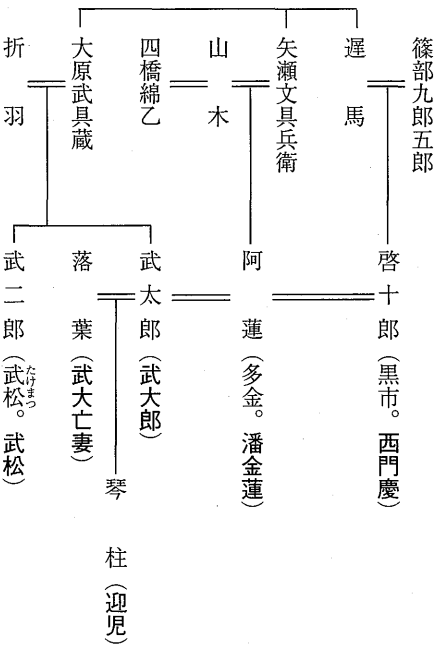

図１　『新編金瓶梅』人物関係図
（太字は『金瓶梅』において対応する人物）

れ、貧苦ゆえに口舌が募って離縁に至る（第一集）。山木は幼い多金を伴って、盲人四橋綿乙に再嫁し、後年美しく成長した阿蓮を、藪代六十四郎（『金瓶梅』の張大戸に相当）へ妾奉公に出すのである（第二集）。かくの如き阿蓮の生い立ちは、『金瓶梅』における潘金蓮の造形を、より複雑化したものといえる。

のちに阿蓮は、六十四郎の妻・岡部の嫉妬がもとで、藪代家に出入りしていた餅売りの武太郎に下げ渡される。彼女は当初、武太郎が従兄であることを知らず、その醜さを忌み嫌うが、すでに両親も横死していたので、主命に従わざるを得なかった。両人の婚姻に関連して、馬琴は第二集下帙（天保五年刊）上冊の前表紙見返しに、「羅貫中が原文を写せし蓬洲が旧稿は　美人帰痴漢二世悪縁」と大書している。第一奇書本の序文には「蓬（鳳）洲」、すなわち王世貞を『金瓶梅』の作者に擬する俗説が紹介されており、馬琴はこれを踏まえて、『金瓶梅』を「蓬洲が旧稿」と称したのである。「美人」阿蓮が「痴漢」武太郎に嫁ぐのは、『水滸伝』や『金瓶梅』に倣った筋立てであるが、ここに「二世悪縁」を設定したのは馬琴の創意であり、件の文句には、自らの新趣向に注意を促す意図が存したのであろう。

阿蓮は婚姻の後も、六十四郎との関係を持ち続けるが、二人の密会はやがて周囲の知るところとなり、武太郎夫婦はやむなく矢瀬から尼崎に転居する。武太郎はこの地において、虎退治で名を馳せた弟の武二郎と再会し、自家に伴い帰るのである。以下の展開は、『水滸伝』や『金瓶梅』とほぼ同様であり、阿蓮の誘惑と武二郎の拒絶、公用による武二郎の旅立ち、そして阿蓮と啓十郎の出会いへと、物語は進行してゆく。

『水滸伝』において、潘金蓮と西門慶との出会いは、以下のように描写されている。

当日武大将次帰来。那婦人慣了、自先向門前来叉那簾子。也是合当有事、却好一箇人従簾子辺走過。自古道、没巧不成話。這婦人正手裏拿叉竿不牢、失手滑将倒去、不端不正、却好打在那人頭巾上。那人立住了脚、正待要発作、回過臉看時、是箇生的妖嬈的婦人、先自酥了半辺、那怒気直鑽過瓜洼国去了、変作笑吟吟的臉児。這婦人情知不是、叉手深深地道個万福、説道、「奴家一時失手、官人休怪」。

（『水滸四伝全書』、第二十四回）[*2]

そもそも、『水滸伝』における金蓮は、「這婆娘倒諸般好為頭的愛偸漢子」（この女は何でも器用にこなしますが、もっとも好きなのは間男することなのです）と形容されるものの、実際に彼女から行動を起こすのは、義弟の武松に対してばかりであった。これに対して『金瓶梅』の金蓮は、張大戸との不貞以外にも、夫の不在時には足を屋外に投げ出して、西瓜の種をかじりながら「浮浪子弟」をからかうような淫婦に仕立てられている。ゆえに右引用の場面においても、『水滸伝』の場合は「這婦人自収了簾子・叉竿帰去、掩上大門、等武大帰来」（女は簾と竿を片付けると門

を閉めて、武大が帰ってくるのを待ちます）」で済まされるのであるが、『金瓶梅』の金蓮は、西門慶に対して並々ならぬ関心を示す。

当時婦人見了那人、生的風流浮浪、語言甜浄、更加幾分留恋、「倒不知此人姓甚名誰、何処居住。他若没我情意時、臨去也不回頭七八遍了」。却在簾子下眼巴巴的、看不見那人、方纔収了簾子、関上大門、帰房去了。

（第一奇書本、第二回）[*3]

ここでの金蓮は、武松の叱責を受けた後も、日中は相変わらずめかし込んで、簾の下にたたずんでいたのであり、西門慶に遭遇して心動かされたのも、決して偶然ではなかった。

『新編金瓶梅』においては、阿蓮と啓十郎の出会いに、作中の重要な小道具の一つである「虎毛の小猫」が介在する。

かの虎毛なる飼ひ猫の、いづちより持て来にけん、いと大きなる魚のわたを、つひばみてありけるを、阿蓮は見つゝ声をかけて、「虎よそはえうなき物を。たうべなば又吐きやせん。とくうち捨ててこちへ来よ。やよなうなう」と招けども、猫は見返るのみにして、ほとり近くは寄らざりしを、いでやをどして捨てさせんと、思ふ阿蓮は栓張棒を、かい取りつ振り上げて、打つおもゝちをしてければ、猫はこれにぞ驚き怕れて、件のわたを檐端より、はたと落として逃げ去りけり。

かゝる所に一人の若人、西のかたより出でて来つ、こゝの門辺をよぎる程に、猫が檐より振り落とす、かの魚の

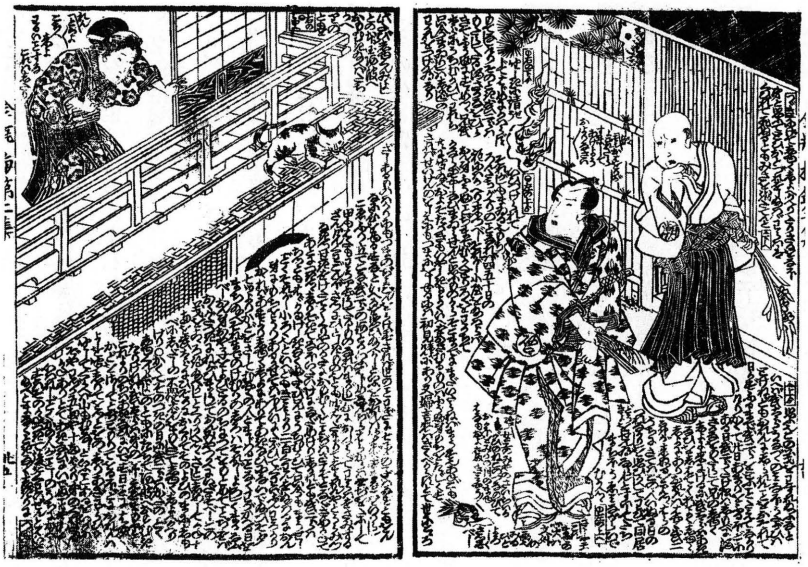

図２　『新編金瓶梅』第二集、34 丁裏・ 35 丁表

わたどつさりと、件の男の肩先を、一ト打ち打つてぞ落ちたりける。阿蓮は上よりこれを見て、「こはあさましや」とばかりに、慌て惑ひて下りて来つ、やがて門辺に走り出でて、かの若人にうち向かひて、「どなた様かは知らず侍れど、そは畜生のわざなれば、いかで許させ給へかし」と、詫ぶれど答へぬ若人は、あくまで罵り懲らさんと、思ひつゝ、早く見かへれば、思ふにも似ず女房の、いとうるはしき顔ばせに、怒りは失せて又さらに、驚くまでに見とれたる、魂浮かれほう笑みて、「いな、うち置かせ給へかし。いさゝか羽織の汚れしとても、かばかりの事何かあらん」

（第二集、三十五丁裏・三十六丁表。図２）

阿蓮の飼い猫は、「かたち相似て、その性（さが）も亦同じければ」（第二集、二十九丁裏・三十丁表）、武大の退治した妖虎の怨念を受け継いでいた。[*4] その契機となった阿蓮の虎見物（二十八丁裏・二十九丁表）以降、彼女が武二郎に関係を迫

る場面（三十三丁裏・三十四丁表）、そして図2における阿蓮・啓十郎の邂逅まで、いずれも妖虎の怨念を視覚化した「鬼火」が、画面の中に描き込まれている。馬琴も「作者云」とした詞書（三十四丁裏）において、「これまでの心火は、文外の画也。見る人よろしく察すべし」と明言しており、武二郎兄弟の不運は、妖虎の怨念によるものと理解されるのである。

先に引用した『金瓶梅』の記述とは異なり、馬琴は後続部分においても、啓十郎に対する阿蓮の慕情を描いてはいない。彼女は「浮浪子弟」に戯れかかるような醜態も演じてはおらず、この点においてはむしろ、『水滸伝』における潘金蓮の造形に類似する。これは、馬琴が『金瓶梅』の如き、あからさまな淫奔を嫌った故でもあろうが、それにも増して、「二世悪縁」と妖虎の怨念という新趣向を、作中でより効果的に機能させるための作意と解すべきものである。

その後、啓十郎は尼妙潮の助力を得て、阿蓮と関係を持つが、そこに至るまでの経緯は、『水滸伝』や『金瓶梅』に比して、極めて簡略に処理されている。悪漢が人妻を籠絡する手練手管を、馬琴が描写せずに済ませたのも、自作を誨淫の書とせぬための用心であり、草双紙の読者層である「婦幼」に配慮した結果であったに違いない。

啓十郎をわが子とは気付いていない九郎五郎は、阿蓮の不貞を武太郎に告げ、両人は揃って妙潮の庵におしかけるが、武太郎は返り討ちにあい、九郎五郎は逃走する（第二集末尾）。武二郎からの報復を恐れた啓十郎は、正妻呉服（くれは）の伯父である三好家の権臣・船館（ふなだて）幕左衛門に依頼して、武二郎を淡路島へ流させた（第三集上帙）。かくて阿蓮は浪花の西門屋に入り、朋輩の力野（りきの）（原作の李嬌児）や卓二（たかじ）（卓丟児）、刈藻（かるも）（孟玉楼）らを押しのけて、啓十郎から「第一の側女（そばめ）」（第三集、二十一丁裏）として寵愛を受けるのである。

二、阿蓮の謀略

『金瓶梅』においては主人の西門慶をも凌駕する、潘金蓮の奸智を受け継いで、『新編金瓶梅』の阿蓮もまた、作中で非道な行ないを繰り返すが、その悪行の最たるものが、第四集（天保七年刊）の末尾から第五集（天保九年刊）の中盤にかけて描かれる、以下の一件であろう。

阿蓮は啓十郎の不在に使用人の笑次（えみじ）と通じる。啓十郎を我が子と知り、西門屋に入っていた九郎五郎は二人の仲に嫉妬し、阿蓮を脅して関係を迫る。一方、阿蓮の濫行を見とがめた力野や卓二は、これを呉服に訴え、ために阿蓮は二人を逆恨みする。九郎五郎が実母山木の仇であることを知った阿蓮は一計を案じ、自身の飼い猫を殺害する。

（第四集、三十七丁裏～四十丁裏）

阿蓮は化け猫騒ぎを捏造して、刈藻に添い寝を懇願する。一方、阿蓮から色よい返事を得た九郎五郎は、夜中に彼女の寝所へ忍び来たる。その気配を化け猫のものと誤解した刈藻は、誤って九郎五郎を殺害し、その直後阿蓮に斬りつけられる。阿蓮はさらに、凶行の場に駆けつけた力野をも斬殺する。折しも帰宅した啓十郎は、阿蓮の無事を喜ぶばかりで、真相を究明しようとはしなかった。この時、正妻呉服が男児を出産する。

（第五集、四丁裏～八丁表）

卓二から阿蓮と笑次との密通を告げられた啓十郎は、笑次の顔を火箸で焼く。笑次の醜悪を厭った阿蓮は、彼をそそのかして卓二を殺害させる。番頭寒八（かんぱち）に捕らわれて責め殺された笑次は、死骸を川に沈められる。

（十九丁表～二十三丁表）

ここで阿蓮と通じる西門屋の小者笑次は、『金瓶梅』における童僕琴童に擬えたものと見てよかろう。琴童は第三夫人孟玉楼の輿入れに従い、西門家へ入った少年であり、第十二回で潘金蓮と通じるが、程なく主人の知るところとなり、打擲の後に西門家を追われる。つまり馬琴は、原作の中では些細な一波乱に過ぎない密通譚を、阿蓮による陰湿な復讐劇の前後に配して、有機的に利用したのである。

前節でも確認したとおり、ここに登場する阿蓮の飼い猫は、武二郎の退治した妖虎の怨念を受け継いでいた。第四集の最終丁には、阿蓮がこの「虎毛の猫」を刺し殺す凄惨な場面（図3）が描かれており、馬琴は本文の末尾において、「こはその因果のこゝにはじめて、巡り来つべき糸口也」と説明している。阿蓮の愛猫殺害は、第五集へ向けての伏線であるばかりでなく、物語全体の「因果」に関わる重要な場面として設定されていたことが分かる。

図3　『新編金瓶梅』第四集、40丁裏

『金瓶梅』の金蓮も、「雪獅子（雪裡送炭）」という名の飼い猫を有しており、『新編金瓶梅』に現われる阿蓮の飼い猫が、この「雪獅子」を模したものであることは疑いを容れまい。原作第五十九回の中で、「雪獅子」は以下のような騒動を惹起する。

却説、潘金蓮房中養的一隻白獅子猫児、渾身純白、只額児上帯二亀背一道黒一、名喚二雪裡送炭一、又名二雪獅子一。（中略）甚是愛レ惜他一、終日在二房裏一用二紅絹一裹レ肉、令二猫撲而捷食一。（中略）不レ料這雪獅子、正蹲在二護炕上一、看レ見二官哥児在一炕上一、穿レ着二紅衫児一動々的頑耍、只当平日哄レ喂他肉食一一般、猛然望下一跳、将二官哥児身上一皆抓破了。只聴那官哥児、呱的一声、倒咽了一口気一、就不二言語一了、手脚俱風搐起来。

程なくして、「雪獅子」は西門慶に投げ殺されるが、官哥はこの一件がもとで夭折し、母親である李瓶児も、我が子の死を悲嘆して他界する（第六十二回）。金蓮は李瓶児に嫉妬して、「雪獅子」が官哥を襲うように仕向けたのであり、飼い猫を謀略の具とすることは、『新編金瓶梅』の阿蓮と同様であった。もっとも、原作における「雪獅子」は登場期間も短く、右の局面ゆえに創出された小道具といえるが、阿蓮の飼い猫は因果の牽引役として、作中で重要な役割を担っている。

笑次によって死骸を川へ捨てられた「虎毛の猫」は、のちに海底へ至って虎河豚となり、笑次の変じた笑鮫とともに、悪龍王多羅阿伽に従って龍宮の澳渡姫を脅かすが、最終的には大原武二郎に討滅される。武二郎の退治した妖虎の怨念は、ここに至ってようやく解消された。澳渡姫は武二郎に対して、虎河豚にまつわる因縁を、以下のように解き明かしている。

かの阿蓮が手飼ひの猫は、もとこれ和殿に打ち殺されし、虎の魂まつはりて、折もあらば和殿はらからに、仇せん

と欲せし故に、つひに阿蓮と啓十郎が、不義いたづらのなかだちにさへなりて、武太郎は殺されたり。

（第八集、三十一丁裏・三十二丁表）

『金瓶梅』の中には、武松が殺害する虎と、金蓮の飼い猫「雪獅子」との間に脈絡は明示されておらず、第一奇書本における張竹坡の批評も、両者の対応には言及していない。そもそも、「雪獅子」の登場は原作の第五十一回においてであり、第一回で語られる武松の虎退治とは、時間的な隔たりが大きい。しかし馬琴は、仇敵関係にある武松と西門慶とによって、各々が殺害されるという経緯から、両者の間に浅からぬ因縁を見出したものと思しく、『新編金瓶梅』においては、この因縁が趣向として顕在化されている。

つまり、第四・五集で描かれた阿蓮の計略は、原作『金瓶梅』のうち、第十二回と第五十九回の趣向を併せ用いたものであり、そこに妖虎の怨念をも絡めつつ、より手の込んだ大がかりなものとなっているのである。原作において、西門慶は怒りに任せて「雪獅子」を殺害したが、『新編金瓶梅』の阿蓮は、謀略の具として「虎毛の猫」を殺めており、構成を緻密にせんとする馬琴の配慮が、この点にも看取される。

殿村篠斎は馬琴に呈した評書の中で、さしたる落ち度のなかった力野と卓二が、阿蓮の謀計により命を落としたことに対して、憐憫の情を示している。同様の見解は木村黙老の評書にも見出されるが、馬琴はこれらの難詰に対して、以下のように返答した。

都て奸悪甚しき者は、誰も悪人なるをしれども、その身にさせる悪なき如くなるも、大悪人に仕へて、その寵を欲

する者は、共に悪人ならざるを得ず。作者ハ是を戒んとて、この両婢妾を作り出したり。原本金瓶梅と大に同じからず、猶再思あれかしとおもふのミ。

（「新編金瓶梅五集篠黙桂三評」、十四丁裏～十五丁表）[*5]

悪漢啓十郎の愛妾もまた、無条件に悪人であり、横死もやむなしとする人物理解は、原作に比して浅薄の誹りを免れないが、馬琴なりの勧善懲悪を徹底させる上では、やはり欠くことのできない改変だったのである。

三、阿蓮の賊寨入り

天保十一年刊行の第七集に至って、阿蓮は新参の使用人で、「不遣小僧」の二つ名を持つ悪少年・秘事松と通じて先行きを危ぶみ、酩酊した啓十郎に毒を盛る。これによって、啓十郎は容貌が醜く変じて不具者となった。この阿蓮による啓十郎毒害は、原作『金瓶梅』の第七十九回における、西門慶の最期に擬えたものである。金蓮は自身の欲求を満たすべく、酩酊して帰宅した西門慶に、過度の房薬を含ませる。これがもとで西門慶は病の床につき、正妻月娘が男児孝哥を出産する直前に他界するのであった。

原作の筋立てに対して、馬琴は『新編金瓶梅』の起筆以前、篠斎に宛てた書翰の中で、「これ則、武太良を薬酖せし悪報といふ評あれども、西門慶を武松にうたせざれば、勧懲にうとかり」（文政十三年三月二十六日付書翰別紙）という見解を示している。薬物による頓死ばかりでは、その悪行を精算しえないと考えた馬琴は、啓十郎を延命させて武二郎の仇討ちに備えたのである。よってこの改変には、原作に対する馬琴の批判意識が反映されていると見なしてよい。

阿蓮と秘事松は後難を恐れて、尼崎の出店に移るが、ここで武庫山の盗賊響馬暴九郎にさらわれて、阿蓮は第一の側

女となり、秘事松も伽小姓として用いられる。管領高国と結んで摂津に侵攻した暴九郎が、大物浦で敗死すると、阿蓮は秘事松を首領に押し立て、赤松家の後裔則若（のりわか）を詐称させる。のちに武庫山の山寨は、三好家の命を受けた大原武二郎らによって攻め滅ぼされるが、阿蓮のみは辛くも逃走した。

第八集における暴九郎の浪花襲撃は、『隔簾花影』（『続金瓶梅』の削節改編作。四十八回）に描かれた金軍の侵攻に擬えられており、この点を併せ考えると、阿蓮・秘事松の賊寨入りには、同作における苗六児（『金瓶梅』の王六児）のたどる運命が投影されたようである。[*6] かつて南宮家（『金瓶梅』の西門家）に仕えていた苗六児は、娘の宋秀姐（韓愛姐）とともに金営へ連行されるが、母娘は揃って将軍斡離不の寵愛を受け、後には六児と不倫関係にある義弟の宋二狗腿（韓二搗鬼）も、金軍内で重用される。もっとも、宋二の場合は、単に義姉や姪の栄華に寄生したばかりであり、秀姐が不貞の咎で処刑されると、六児とともに金営を脱出しているが、秘事松は阿蓮の手引きで首領の地位を略取しており、最終的には龍宮から帰還した武二郎に討ち取られるのである。

北宋末の金軍侵攻は、『金瓶梅』の結末部分にも描かれるが、『隔簾花影』においては、この動乱が作品全段の展開と密接に関わっている。馬琴は『隔簾花影』を、天保五年から翌年にかけて披閲し、前伝以来の因果を語り尽くさんとする姿勢に、一定の評価を与えた。同作の繙読以後、『新編金瓶梅』の構想にも少なからぬ変化が表われており、阿蓮・秘事松の「落草」も、起筆当初の腹案には含まれていなかったものと考えられる。

正統ならざる者が、女性の手引きで地位を得るものの、最終的には善人らによって討滅されるという「簒奪」の筋立ては、馬琴最晩年の読本『新局玉石童子訓』第六版（弘化五年、文渓堂等刊）の中にも見出しうる。ここでは悪漢曾根（そね）見健宗（みたけむね）が、自身に嫌疑をかけた部領庄（ことり）の郡司範的（のりまと）を殺害した後、実の叔母である大刀自の勧めに従い、鏑野（かぶらの）家を相続し

て善人たちを虐げるのである。

藤沢毅氏は、この「御家騒動を裏に置」いた筋立てが、『童子訓』の前編に当たる読本『近世説美少年録』（文政十二年～天保三年、千翁軒・文渓堂等刊）において、最大の山場として予定されていた、陶晴賢の大内家簒奪を意識したものと推定する。[*7] 周知の通り、『美少年録』は白話小説『檮杌閑評』（五十回）に趣向の多くを依拠しており、主人公の悪少年・末朱之助晴賢は、原作の魏忠賢に擬されている。かつての許嫁・黄金（原作の客印月）の手引きにより、周防大内氏の家中で出頭した朱之助は、主君義隆を弑逆して、主家横領に至る構想であったに違いない。

しかし、自身の多作や家庭的な不幸、天保の改革の余波などが、馬琴の『美少年録』嗣作を阻み、『新局玉石童子訓』の冒頭五冊（執筆は天保十三年）が刊行されたのは、『美少年録』第三輯の刊行から十三年を経た、弘化二年正月のことであった。この「十三年間の空白」は、馬琴に心境の変化と作品に対する省察の機会を与えており、『美少年録』と『童子訓』との間には、明らかな構想の変化をうかがいうる。『童子訓』では、善少年の大江杜四郎（元就の庶弟）が物語の中心となり、彼の武者修行に伴って、舞台はむしろ東国へと移動していくのである。ここには、『檮杌閑評』に学んだ淫奔なる趣向への反省や、天保六年に裁決の下った仙石騒動への配慮が作用していた。[*8]

天保元年から編述の開始された『新編金瓶梅』は、その大部分が「十三年間の空白」の中で綴られた作品であり、続刊の目処の立たない『美少年録』の趣向が、この合巻に持ち込まれた可能性を考慮してもよいであろう。[*9]『新編金瓶梅』の秘事松が、阿蓮の手引きで賊寨の主となり、赤松家の後裔を詐称する筋立ても、『美少年録』に予定されていた朱之助の発跡譚を、簡略化して転用したものだったのではあるまいか。

もっとも、朱之助と秘事松の主家横領には少なからぬ懸隔があり、大内家が厳然たる守護大名であるのに対して、暴

九郎は赤松家の残党とはいえ、所詮草賊に過ぎない。しかし、朱之助も秘事松同様に、男色をもって主君義隆の寵愛を得た筈であり、情人である黄金が、朱之助の強力な後ろ楯になることは、『檮杌閑評』の筋立てから推しても蓋然性が高い。よって朱之助の主家横領は、類型として『童子訓』の健宗よりも、むしろ秘事松の場合に近似しており、馬琴は『隔簾花影』における苗六児の物語とともに、『美少年録』未刊部分の構想をも導入して、阿蓮・秘事松の賊寨入りを綴ったものと想像される。

この阿蓮落草の筋立ては、管領細川高国と三好海雲（元長）父子の抗争を背景としているが、作中に描かれた畿内争乱は、必ずしも史実に則ったものではなく、とりわけ三好宗三（政長）の参戦と敗死などは、明らかな錯誤といえる。そもそも、馬琴は『新編金瓶梅』第二集において、「三好は本ン国阿波なれども、近頃大物の浦の戦ひに、高国入道常桓を討ち滅ぼして、勢ひ朝日の昇る如く」（二十九丁裏・三十丁表）と明記しており、第八集で再度高国の敗亡が描かれることは、撞着の譏りを免れえない。もっとも、第二集執筆の時点では、阿蓮の賊寨入りという筋立てそのものが、馬琴の構想の中に存さなかった筈であり、『隔簾花影』の披閲（天保五・六年）に伴う構想改変が、件の齟齬を引き起こしたものと考えられる。

天保七年以降、馬琴は蔵書を順次沽却しており、『重編応仁記』（小林正甫著。宝永八年刊）等の関連史料も、すでに彼の手元を離れていた公算が高い。とはいえ、自著『美少年録』の第二輯（文政十三年刊）や、林羅山の『京都将軍家譜』[*10]（明暦四年刊）などを参照することによって、馬琴は高国敗亡の正しい概要を容易に確認しえた筈であり、よって右のような錯誤も、意図的な改変と見なすべきである。急激に視力が衰えつつあった当時の馬琴にとって、史料を吟味して畿内の兵乱を描き込むことは困難であったが、婦幼の読み物である草双紙においては、多少の虚構や前後撞着も、

さしたる瑕瑾にはならないと判断したのであろう。

畿内の争乱を描くに先立ち、馬琴は第七集の終盤において、高国配下の勇将・嶋村貴則を初めて登場させている。ここで貴則は、乞食たちに蹂躙された啓十郎夫婦を救うのであるが（三十八丁裏・三十九丁表）、この役回りを彼が演じる必然性は見出しがたい。よって、貴則の唐突な出現は、続く第八集における主君高国の敗亡を見越した、いわば「伏線」であったと解してよかろう。

『新編金瓶梅』第七集の筋立てについて、馬琴は天保十年九月二十六日付の篠斎に宛てた書翰の中で、「ちと無理なる趣向あり。そは勧懲に係る故ニ御座候」と述べている。陸水尼（くがみ）の登場や阿蓮による啓十郎毒害、そして呉服の遭難など、たしかに第七集には物語全体の勧善懲悪に関わる筋立てが少なくないが、貴則の不用意な登場は、作品序盤の記述と齟齬をきたしていることもあり、とりわけ「無理なる趣向」であった。この点から、畿内争乱と高国の「大物崩れ」も、「勧懲に係る」重要な趣向として、馬琴にとっては不可欠のものであったと考えられるのである。

四、仇討ちの完遂

前節において、『美少年録』からの趣向転用の可能性に言及したが、そこで問題となるのが、馬琴は何故『金瓶梅』や史実を逸脱してまで、阿蓮の賊寨入りを描く必要があったのかという一事である。晴賢の主家簒奪は、『美少年録』全編の勧善懲悪に関わる重要な趣向であり、同様の類型を持つ鏑野家の御家騒動も、『童子訓』における「勧懲」を正す機能を有していた。善悪の相違こそあれ、阿蓮・秘事松による賊寨の略取にも、やはり作中の勧善懲悪に関与する作意が込められていたのではあるまいか。

『新編金瓶梅』の起筆以前、馬琴は『傾城水滸伝』第五編（文政十一年刊）において、『金瓶梅』の母胎となった『水滸伝』の武松・金蓮譚を翻案している。ここで、潘金蓮に相当する浮浪子金蓮助（きれすけ）は、武大に模した餅売り女・豚代（ぶたよ）の「関防人」であり、両人は婚姻関係を有さなかった。この点について、馬琴は篠斎に宛てた書翰の中で、「キレ介ヲ関防人にせざれバ、かたき討の名、正しからず」（文政十一年三月二十日付）と説明している。たとえ報仇の大義名分があるにせよ、兄嫁を殺すという行者武松の行為を、馬琴は無条件に許容しえなかったのであろう。執筆の時期は隔たるが、文化五年刊行の読本『雲妙間雨夜月』（文化五年、柏栄堂等刊）にも、武松の金蓮殺しが趣向として用いられているが、ここでは伊原武章（たけあきら）による兄嫁蓮葉（はちすば）殺害が「誤殺」に改変されている。[*11]

『新編金瓶梅』において、阿蓮は原作の潘金蓮と同様に武二郎の「兄嫁」となっており、彼女の犯す罪が武太郎を殺して啓十郎に嫁いだばかりであったならば、武二郎の敵討ちも「兄嫁殺し」の誹りを免れえない。そこで馬琴は、ひとたび阿蓮を暴九郎の妻として、逆賊の余類という罪状を付加し、武二郎が彼女を殺害する正当性を補完したのであろう。

淡路島鴛鴦楼において船館幕左衛門らを殺害したのち、武二郎は海路を逃走するものの追っ手がかかり、追い詰められて水中に没したところ、龍宮に至って澳渡姫（おとひめ）と対面し、時が至るのを待つように諭される（第六集）。第八集における武二郎の悪龍王退治にも、俵藤太の伝説が踏まえられており、総じて寓話的な筋立てといえるが、龍宮における武二郎の雌伏は、阿蓮や啓十郎の跳梁を可能にするための作意でもあった。

多羅阿伽を退治した後、武二郎は人間界に戻ることを許され、主君長蒹の命により武庫山の賊寨を撃破して、赤松則若こと秘事松を誅殺した。しかし澳渡姫も予言したとおり、武二郎が阿蓮を討ち取る機は熟しておらず、彼女は単身賊寨から逃走して、後に啓十郎と再会を果たす。母親陸水のもとで病を癒した啓十郎は、阿蓮を伴って五条の庵から逃走

し、東戸屋西啓と名を改めて尼崎の町はずれで商売を再開した。阿蓮と啓十郎は、この地で武二郎の襲撃を受けることとなる。

第九集擱筆の直後、馬琴は篠斎に宛てた書翰の中で、『新編金瓶梅』続刊部分の腹稿を、以下のように語っている。

武次郎あだ討之所、おれん・啓十郎ヲとらへ候所ニて、九集ハ終候。十集ニ至り、仇討之事、委敷知られ候事ニ候。来年十集ニて結局ニいたし度候得共、夫より長く成候半や、斗難存候。

（天保十二年七月二十八日付篠斎宛書翰・代筆）

馬琴は当時、媳婦路女の代筆にすがりながら、『南総里見八犬伝』と『新編金瓶梅』の述作を続けていたが、ことに『新編金瓶梅』の場合は、阿蓮・啓十郎の乱倫を精算するためにも、武二郎による仇討ちの成就が急がれた。実際に、翌年刊行された第九集の末尾で、阿蓮と啓十郎は武二郎に捕らわれ、二人の仲を取り持った悪尼妙潮も、武太郎の娘琴柱に足止めされる。かくて、仇討ち完遂の目処は立てられたが、『新編金瓶梅』全段の勧懲は、武二郎の報仇のみによって全璧されうるものではなく、馬琴は啓十郎の栄華に寄生した小人たちの結末にも意を用いていた。ゆえに、第九集を綴り終えた時点では、十集をもって完結しうるものか、作者自身にも測りかねたのである。

天保十三年六月、改革に伴う出板統制の強化に際会した馬琴は、「戯墨の筆」を絶つ決意を固めたが（「著作堂雑記抄」）、翌々天保十五年（弘化元年）には、木村黙老からの懇請を容れて、『新編金瓶梅』第十集の稿本を編述した。原作『金瓶梅』をも披閲し、『新編金瓶梅』における改作の妙を味わいえた黙老にとって、この合巻の中断はひとかたならず惜

図４　『新編金瓶梅』第十集、４丁裏・５丁表

しまれたのであろう。改革が沈静化して、弘化四年に『新編金瓶梅』が続刊された際には、黙老が馬琴に述作せしめた板下写本が用いられた。

この第十集冒頭において、武二郎は仇討ちの履行に先立ち、以下のような言葉で阿蓮と啓十郎とを譴責している。

毒婦多金が五逆十悪、今さらに数ふるにいとまあらず。いはんや又武庫山の、山賊の頭領暴九郎と、秘事松が二代の妻にさへなりて、しばし逆意を振ひしは、許されがたき国賊也。又此奸民（かんみん）啓十郎は、不義の富みに驕りを極めて、或ひは人の妻を奪ひ、多く人をしへたげ殺しし、その罪数へ尽しがたかり。琴柱が為には父の仇、我が為には兄の敵、国の為には逆賊奸民、およそ此大悪男女は、八ツ裂きにして後々（のちゝ）の、乱臣賊子を懲らすべし。

（五丁。傍線稿者。図４）

右の記述によって、第八集における阿蓮の賊寨入りが、

単なる一過性の趣向ではなく、『新編金瓶梅』全段の勧善懲悪に関わる、重要な筋立てであったことが確認される。暴九郎が単なる草賊として終わることなく、細川高国に荷担して三好海雲に敗亡したのも、三好家の家臣である武二郎によって、阿蓮が討ち取られる正当性を補強するものといえる。第八集における「大物崩れ」の趣向化も、この点から「勧懲に係る」ものであったと見なしてよかろう。

かくて、原作『金瓶梅』における西門慶の最期を、「勧懲にうとかり」（前引、文政十三年三月二十六日付篠斎宛書翰別紙）と難じた馬琴は、阿蓮とともに啓十郎をも、大原武二郎に誅殺させた。妖虎の怨念によって結ばれた、阿蓮・啓十郎の悪因縁は、両人の従兄弟にして虎退治の英雄・武二郎によって精算されたのである。

おわりに

「四大奇書」に数えられる長編白話小説のうち、『金瓶梅』のみは近世期に通俗本・施訓本が刊行されなかった。これは、同作の背負う穢書・淫書という悪名や、文体における口語性・写実性ゆえの難解さが、大きな障害となったためであろう。また沢田瑞穂氏は、『金瓶梅』における「情緒と美意識の欠如」を指摘し、同作が日本であまり普及しなかった一因を、この点に求められた。[*12] 蓋し卓見である。

『傾城水滸伝』（文政八年～天保六年、仙鶴堂刊）の盛行を受けて、『金瓶梅』の翻案を思い立った馬琴は、文政十三年の初頭に第一奇書本を借り寄せて再閲し、同年三月二十六日付の殿村篠斎宛書翰（別紙）において、同作の概略と自身の見解とを詳述している。この記事に対しては、すでに注1拙稿において考察を加えたが、彼にとって『金瓶梅』は、「勧懲」への配慮は認めうるものの、所詮は「宣淫導慾の書」に過ぎなかった。

同じ書翰の中で、馬琴は「武太良のこと」、すなわち武大をめぐる仇討ちの筋立てを、『金瓶梅』唯一の「巧なる趣向」と評しており、同作独自の筋立てには、ほとんど価値を認めていない。『新編金瓶梅』は、原作に対する如上の見解に根ざして執筆されたものであり、『金瓶梅』の単純な翻案作になりえなかったのも、当然の帰結といえる。

『新編金瓶梅』の阿蓮は、商家の愛妾から賊寨の女主人、そして病身の乞丐と、変転極まりない運命の末に、従兄弟にして義弟という、強い紐帯を持つ武二郎に誅殺された。彼女の造形は、『南総里見八犬伝』の船虫ほど魅力的なものとはなりえておらず、ましてや「情緒と美意識」などを望むべくもないが、それでも徹底した毒婦として、啓十郎や武二郎さえ及ばない、作中第一の存在感を有している。馬琴は彼女の悪行を描き込むことによって、武二郎の仇討ちにおける名分を正し、勧懲が徹底されていない、原作の不備を補ったのである。

注

＊1　拙稿「『新編金瓶梅』発端部分の構想と中国小説」（読本研究新集第四集。平成15年、翰林書房）参照。

＊2　引用は明清善本小説叢刊初編（一九八五年、台湾天一出版社）所収の『李卓吾批評忠義水滸伝全書』（百二十回本）による。訓点は、国訳漢文大成『水滸伝』上巻（大正12年、国民文庫刊行会）を参照して施した。

＊3　引用は大連図書館蔵孤稀本明清小説叢刊（二〇〇〇年、大連出版社）所収の『金瓶梅』（第一奇書本）による。訓点は、原田（高階）正巽による施訓写本（鹿児島大学附属図書館蔵。徳田武氏所蔵の複写による）を参照して施した。

＊4　阿蓮と啓十郎との出会いが、妖虎の怨念に導かれたものであることは、高橋則子氏「合巻『金瓶梅曽我賜宝』考」（『草双紙と演劇――役者似顔絵創始期を中心に――』所収。平成16年、汲古書院）にも指摘がある。

＊5　早稲田大学蔵資料影印叢書『馬琴評答集（五）』（平成3年、同大学出版会）、六十四～五頁。

＊6　拙稿「『新編金瓶梅』と『隔簾花影』」（近世文芸82。平成17年7月）参照。
＊7　藤沢毅氏「『近世説美少年録』の成立」（国文学論集24。平成3年1月）。
＊8　天保七年三月二十八日付、ならびに同十三年二月十一日付の殿村篠斎宛書翰において、馬琴は『美少年録』の嗣作に対する躊躇を吐露している。
＊9　このように考えられる筋立ての一例として、『新編金瓶梅』後半部分における龍神信仰の趣向化がある。詳細は、拙稿「『新編金瓶梅』の翻案手法――呉服母子の受難と中国小説」（江戸文学35。平成18年11月）参照。
＊10　羅山の『将軍家譜』を再度購入した事情については、天保八年十二月朔日付、ならびに天保九年七月朔日付の桂窓宛馬琴書翰参照。
＊11　拙稿「文化期の馬琴と『金瓶梅』」（古典資料研究8。平成15年12月）参照。
＊12　沢田瑞穂氏「葡萄棚の下で」（『宋明清小説叢考』所収。昭和57年、研文出版）。

文献からの引用に際しては、傍訓の取捨・句読の付加などの処理を行なった。特に合巻からの引用は、読み誤りのおそれがない範囲で、適宜漢字を宛てた。

本稿所掲の『新編金瓶梅』は、慶応義塾大学三田メディアセンター蔵本、ならびに拙架蔵本による。また、馬琴書翰からの引用は、柴田光彦氏・拙共編『馬琴書翰集成』（平成14～16年、八木書店）によった。

資料の閲覧をご許可いただいた諸機関、ならびにご教示を賜った方々に、末筆ながら厚く御礼申し上げます。